異世界の料理人

そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界の料理人

【Ｎコード】
Ｎ６４９８Ｚ

【作者名】
そら

【あらすじ】
鈴野尊（２７歳）、元料理人。命の灯が消えかかった娘の命を救うには、女神ディオネが管理する「ディオネシア」という名の異世界で“俺ができること”をしなければならない。娘とともに異世界に召還された尊は、異世界の食文化に愕然としつつも、食材を集めて元料理人としての腕を揮う。―“俺ができること”とは？―女神の審判の日までの元料理人の異世界奮闘記！　・・・になるといいなー。※３日程度で１話の更新になるかと思います。ごゆっくりお待ちいただければ幸いです。

プロローグ（前書き）

プロローグです。とっても暗いです。

プロローグ

1．プロローグ

白のパイプベッド、白の布団、白のカーテン。室内をほぼ白に統一されたこの病室でベッドに娘が横たわっていた。病室のカーテンは閉めているのだが、照明とカーテン越しの秋の日差しで明るい。
俺は、病院に入院している娘に会うため、仕事の合間に抜け出してきたのだ。

「ぱぱ・・・」
時々、うなされたように俺を呼ぶ。
「唯・・・」
俺は、娘をただ見ていることしかできない。

鈴野　唯。今年、幼稚園の年長になった娘。生まれてすぐに母親を失ったため、母親を知らない。非情な運命のもとに生まれた娘だけど、本当に良い子に育ってくれた。男手一つ育てた・・・と言えればカッコいいのだけれど、残念だが違う。娘を良い子に育てたのは、妻の母親、娘の祖母だ。祖母は学校の先生をしていたこともあるそうで、本当に厳しく、優しく、愛情をもって育ててくれたと思う。

その祖母もいない。昨年、唯の幼稚園入園を見届けると、まもなく亡くなった。もともと、心臓が悪かったらしく、体調を崩してからあっという間だった。
唯もその悲しみからようやく立ち直り、元気な娘の笑顔が見られたと思ったら、1年も経たずに高熱を出して倒れた。

―――原因不明

医者から聞かされた言葉はそれだった。突然、幼児が高熱を出すということは、知識として知っていたが、原因がわからないとなるとそうとも言っていられない。自宅療養1カ月、入院が5カ月にも及ぶ闘病生活で、ゆっくりと衰弱していく娘をただ見ていることしかできなかった。

思えば、俺の妻、幸も生まれつき体が弱く、子供の頃から高熱を出しては寝込んでいたという。妻と出会ってからも、何度か熱を出して寝込んでいたことがあった。
しかし、これまで風邪をこじらせることもなく元気だった娘が突然高熱を出した時、不覚にも妻の姿をダブらせてしまった。それがいけなかったのか・・・。

俺は娘のために働くことしかできなかった。親もなく、孤児だった俺に頼れる親戚はいなかった。本当はいるのかもしれないが、産みの親を知らない俺には分からない。妻の幸も父親を早くに亡くし、母子家庭だったという。そちらの親戚もなく、天涯孤独に近い。

働いて入院費を稼ぐ。高校を中退し、町の大衆食堂の厨房で働き、今はその食堂で料理人として朝から晩まで働いた。医学の知識もなく、他に娘に何もしてやれない今の俺に出来ることを必死にやった。娘が元気になることを信じて、娘の元気な笑顔が見られることを信じて――

「ぱぱ・・・」
唯の目がうっすらと開いた。
「唯、パパはここにいるぞ」
唯の手をとり、声をかける。
「ぱぱ・・・。ここ、・・・夜なの？・・・まっくら・・・」

今はまだ昼過ぎ、カーテンは閉めているものの日差しで明るいにもかかわらず。

――――目が

「――――っ」

唯の言葉に奥歯をグッと噛みしめ、

「唯、そうなんだ。今は真夜中なんだよ。パパのこと、わかるか？」

声が震えないように、そっと、そっと声をかける。

「・・・うん」

焦点の合っていない目でこちらを向こうとする。声のする方を向いたという感じだ。

「ぱぱ・・・あのね・・・、ぱぱと・・・もっと・・・おはなししたかった・・・。ぱぱと・・・あそびたかった・・・」

――――唯

考えてみれば、唯は産まれてすぐに母親を失い、親は俺だけだった。幸の母親が母親代わりだったが、代わりだ。親じゃない。俺だけだったのに。唯と顔を合わせるのは、朝から幼稚園に送るまでと幼稚園のお迎え、夜の少しの時間だけだった。休日もほとんど仕事だった。

俺は、生活のためと仕事に明け暮れ、満足に遊んであげられなかった。構ってあげられなかった。

唯の手を両手で握りしめ、唯に声をかける。

「それじゃ、唯。元気になったら動物園行こうか。唯、行きたがってたよな。暖かくなった海でもいいぞ、唯」

そっと声をかけているつもりだったが、後のほうは懇願に近いものだった。

――唯はわかっているんだ。俺と過ごせる日が、もう長くないことを

「ぱぱ・・・あのね・・・」
弱い呼吸で唯は言葉を続ける。
「・・・だいすき・・・」
弱弱しい言葉でもはっきりと俺の耳に届く。
「唯っ」

――神様

「唯、パパも大好きだぞ」
その言葉に唯がかすかに微笑んだ。
「えへへ・・・」

微笑みが消えると、ゆっくりと唯の目が閉じられる。わずかに保っていた唯の頭や手の力も抜けていく。

――神様、この世界にいるのなら、いや、この世界じゃなくても。助けてくれ。唯を、唯を助けてください。

『助けたいですか？その娘を』

ベッドの唯にしがみつき、声なき声をあげていた俺に響いてきた言葉だった。

プロローグ（後書き）

はじめまして、そら　と申します。
拙い文章にもかかわらず、ここまでお読みいただきありがとうございます。

女神の選択（前書き）

２話目です。
表現の仕方が難しかったのですが、深層世界といいますか、精神の世界です。
神様との邂逅シーン。

女神の選択

2. 女神の選択

顔を上げ、目を開くと世界は真っ白だった。何もない世界。そんなところに俺はいた。先ほどまでしがみついていたはずの唯の姿も見えない。身体の感覚もあやふやだ。

――ここは・・・？

『この子を助けたいですか？』

頭に響く女性の声、とても澄んだ声で心地よい。だが、その余韻に浸る間もなく、叫ぶように声を上げた。

――助けてくれっ！

『この子の命の灯は消えかかっています』

――っ

『この子は、もう、この世界で生きていくことはできません。ですが、私の世界ならそれも可能です』

――助けてくれっ！娘が助かるなら俺はどうなっても構わないから！

頭で考えた言葉ではなく、心の声を高らかに叫ぶ。唯がまた元気になってくれるなら、俺自身は本当にどうなってもいい。結果的に唯を悲しませることになるかもしれないが、それでも強く思った。

『貴方も一緒です。この子を助けますが、貴方は私の世界で“貴方ができること”をなさってください』

――俺にできること？

『そうです。それが何かは、貴方が私の世界で考えてください』

――そんなことで・・・

そんなことでいいのか？ようやく頭が働いてきた。しかし、娘を助ける代償が“俺にできること”をするって・・・。

『これは選択です。このままこの世界で貴方は生きていくこともできます。この子は諦めていただかなくてはなりませんが』

ようやく働き始めた頭が、また、この一言で停止した。

――唯を助けてくれっ！

思いのままに叫ぶ。今の望みは、唯一の望みはそれだけだから。

『・・・・わかりました。思いは強いようですね』

その言葉に安堵した。これで唯は助かるんだ。何の保証もないにもかかわらず、そう思った。

幸いというか、唯以外の身内と呼べる存在がいないので、唯が一緒のようだし、この世界に心残りはない。職場の仲間もいることはいるのだが、唯の命と引き換えと言われればそうも言ってられない。

そういえば、このところ幸の墓参り行ってないな。まぁ、幸も理解してくれるだろう。唯のためなんだから。墓前に報告できなくて悪いが、仕方ないだろう。

――それにしても、あなたの世界？

『そうです。こことは別の世界。人が生きる別の世界です』

――俺ができること？

高校を中退して大衆食堂で働いただけの俺には、できることなんてほとんどないと言っていい。強いてあげるとすれば、料理ぐらいか。仕事でやってたからな。料理人の端くれとして、人並み以上にできることと言えばそれくらいか。異世界で料理屋でも開くか。異世界にもこの世界のような食材ってあるのかな。まぁ、人が生きる世界だから大丈夫か。

『1年後、貴方が何をなさったか確認しましょう』

つらつらと思考に浸っていると、また、頭に声が響いてきた。そうだ、これは代償・・・。唯の命と引き換えなんだ。適当に考えていいものじゃないんだ。俺ができることを必死に考えないと。

しかし、もし俺が代償を支払えないと唯はどうなるのだろう？引き換えは唯の命。まさか・・・

――もしも、もしもだ、俺が、その、何もできなかったら？

『・・・・すべては無かったことになります。今この時点に戻り、この世界で貴方は生き続け、この子の命はここで失われます』

――っ

やはり、そういうことなのか。身体の感覚がないのに、冷や汗が流れたような感じがする。

考えろ、俺にできること。何ができる？これまで唯に何もしてやれなかったんだ。今、唯の父親として俺にできることを考えるんだ。

――なぁ、幸。俺って何ができるんだろうな。唯の命がかかっているのに、何もできないのか？

――なぁ、唯。パパは何ができるかな。唯に何もできなかった俺にもできることがあるかな。

『先ほども言いましたが、何ができるかは私の世界を見て、考えてはいかがでしょうか？』

――ごもっともです。

示すべき相手に助けられてしまった。ガックリと気を落とす俺に、

『そろそろ時間になります。よろしいですか』

――ああ。唯を、唯を助けてくれ。

『わかりました』

その言葉とともに真っ白なだけだったこの世界に強い光が差し込む。眩い光に無意識に目を閉じてしまう。

そのあと少し間があった。目を瞑ったままでも、強い光を感じる。

再び、女性の声が響く。

『・・・・選択はなされました。・・・ようこそ、我が“ディオ

ネシア”へ・・・』
その言葉を最後に俺は意識を失った。

『尊さん、楽しみにしていますね』
尊にそんな言葉が届いていたのだが、意識のない尊は聞くことができなかった。

女神の選択（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

女神・ディオネ登場です。・・・が、女神様、名のっていませんね。

神様の表現と尊の表現が微妙に違うんですよね。

異世界へ（前書き）

ようやく異世界に旅立ちました。
ここから異世界編です。元気になった唯の姿を少しずつ表現していきます。

異世界へ

3　異世界へ

朝、目が覚めるのと同じように、目が覚めた。どこかはわからないが、ベッドのようなものに仰向けに横たわっているようだった。寝起きは悪い方じゃないが、まだ頭がボーっとしている。

何があったんだ？――――そうだ、神様に会ったんだ。
神様？――――神様でいいんだよな。会ったんだ。
それで・・・どうしたんだ？――――唯のことを祈ったんだ。

――――唯っ

そこまで考えて一瞬に覚醒した。慌てて俺の周りに視線を向ける。よくわからないが、どこかの部屋にいるようだ。病院の白を基調とした病室とは違う、木目調の部屋・・・というか、木造りの部屋。おそらくこちらも木造りであろうベッドに俺はいた。

唯は、俺の隣にいた。

スヤスヤと眠っているように思える。病室にいたときのように熱にうなされているわけでもなく、穏やかな表情だった。愛らしい娘の寝顔をずっと見つめていたいと一瞬考えたが、やっぱり確かめたい。

唯に声をかけるため、身体を唯の方へ向けようとすると、唯の小さな手が俺の服を握っていることに気付いた。離されないように、唯がいつも俺にする癖のようなものだ。その手を潰さないように、ゆ

っくりと唯の方へ身体を向ける。

「唯？」

そっと声をかける。

すると、唯の目がゆっくりと眩しさに耐えるかように開いていく。

「・・・ぱぱ？」

寝ぼけているような声だが、病室にいたころに比べてはっきりとした声で俺を呼ぶ。

「唯、パパだ。わかるか？」

「うん。おはよう、ぱぱ」

唯だ。元気だったころのいつもの唯だ。

「ああ、おはよう」

そう返すと、唯は俺に抱きついてくる。

おはよう、と言ったものの、時間の感覚がないので朝なのかどうなのか、わからないが。

「ぱぱ、ここ、どこ？」

ひとしきり抱きついたあと、周りをキョロキョロと見回し、俺に聞いてくる。

「どこなんだろうなー」

俺にもよくわからないので、そのまま答えた。

この部屋には、俺と唯が寝ているベッド1つと、クローゼットらしきものが1つ。大きな扉が付いているのは、この部屋の出入り口だろう。木窓が一つ付いているが、すぐ外に樹が生い茂っており、風景は見えない。俺の記憶にある場所じゃない。ここが異世界なのか？

「お姉さんがいってた、いせかい？」

唯につられてきょろきょろと見回していると、唯がそんなことを言

った。

――――お姉さん？

「唯、お姉さんって誰だ？」

「しらないひと。声だけきこえた」

俺に選択を示した神様だろうか？俺も姿は見ていない。声が頭に響いてきただけだ。

「そのお姉さんが異世界だって言ったのか？」

「うん。いせかいってところにいくって、いってた。ぱぱもいっしょ」

「そうか・・・」

よくわからないが、唯のところにもあの神様は現れたらしい。とりあえず、唯の頭を撫でておく。

「うん」

嬉しそうに目を細めて返事をする。唯は頭を撫でられるの好きだからなぁ。

頭を撫でていた手を、おでこのところにもってくる。

「ぱぱのて、あったかい」

――――うん、熱はない。唯は本当に元気になったんだ。

「あったかいか？」

「うん、いつもひんやりしてた」

そう言って、自分の手をおでこの上の俺の手に重ねる。唯の手は少しひんやりしているが、生きている温かさだ。

「唯、もう少し寝ていいぞ」

何せ、病み上がりだからな。いくら元気になったからといって、す

ぐに今までどおりにさせるわけにはいかない。
「ゆい、ねむくないよ？」
声もしっかりしているから本当なのだろう。それでも無理はさせたくない。
「病気が治ったばかりだからな。眠って、しっかり治しちゃおうな」
不思議そうな顔で俺を見てくるが、納得したのか、うん、と頷いて目を閉じる。
聞き訳の良い子だな。

ここは神様のいう異世界なのだろう。壁紙のない木の壁、アルミサッシのない木窓、天井に目を向けても照明器具もない。夜になったら明かりはどうするのだろうか。異世界というより時代遡行だな。
この世界で俺にできること、この世界をよく見てみないといけないな。

「ぱぱ」
目を瞑ったままの唯が声をかけてくる。眠くないのだろう。俺に言われたからか目は瞑っているが。
「どうした、唯」
「あのね、どうぶつえん行きたい」

普段の唯は我がままを滅多に言わない。普通の幼稚園児のような駄々をこねるということもない。それなので、唯が行きたいというところには連れて行ってあげたいのだが・・・。あるのか？動物園。

「うーん、動物園なぁ」
「いせかいに、ないの？どうぶつえん」
悲しそうな顔をして聞いてくる。
「動物園さがしてみような」
ひとつ目標ができた。この世界で動物園があるか確認してみよう。

「うん！」
よかった、笑顔になった。そろそろ、俺までここで寝ているわけにもいかないか。
そう思い、身体を起こそうとしたその時、部屋の外から足音が聞こえてきた。

———コン、コン

「目を覚まされましたか？」
扉の外から女性の声が聞こえた。

異世界へ（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。

唯、元気になりました。
これから元気な唯を表現できるのは、書く方も嬉しいです。

※これまで誤字脱字等ございましたらお知らせください。投稿前に確認してはいるのですが、自信がないのでお願い致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6498z/

異世界の料理人

2011年12月27日20時48分発行